

あるのだが、それと同時によく使うものであることもまた強い要素になっていると考えられる。

ここで注意したいのは、a、b、の頻度に比べて、大へん数字が小さいことである。

これは、子どもの中で、「大切にするもの」をもっている子が、一見、あまり多くはないのだ、と見られることだともいえよう。しかし、少しつっこんで考えると、何分にも調査に答えたのは主として大人なのであるから、若し、大人が気づかないところで子どもが何かを大切にしていたら、それはこの調査では全々あがってこないですまされていることになると考えねばならない。私は、或程度、それが当然考慮されることをみとめたいと思ふ。

### 五、結 論

結局、得られた結論は平凡であるかもしれないが、重要な問題だといえるのではないだろうか。

第一には、子どもは玩具に対する要求を、或程度自給自足しており、それは、自然物や比較的容易に手に入る価格の低い小店の売品でみたされている場合が多い、ということである。ポケットの中のものがそれを示す。そして、ポケットまたは、ふと、ころにものを入れる子は、都市農村を通じて約80%もあり、或いは更に上回るのではないかと思われるのであるが、ポケットにものをもつ、ということ自体が自主的な生活態度の一端を示すものであり、そして、その中に入れていられるものの実態もまた子どもの自主的な生活態度を表明していると思われる。

第二には、子どもの所有に対する執着は、実用と愛情とに基いており、しかも、子ども自身の独特な選択と、子ども同士の社会的配慮に左右されるという事実があることである。要求するものがあり

方と、大切にするものがあり方から、それは汲みとれる。

第三には、子どもの選択は、或意味で非常に巾が広く、或意味では限られている、と見られることに注意したい。巾が広いというのは、今までのべた中には言い切れなかったのであるが、頻度の少ないものとしてあがっているポケットの中のもの、大切にしているものの、実に種々雑多な品目によって知られるのである。しかしまた、「人形とりのりもの玩具」の圧倒的な数は、誰でもが欲しがらるもの、そして昔から子どもが好きなものにそうそう変らない、ということになるであろう。

このようなことを総合して、子どもの玩具に対する要求は、社会人として子どもの自主的な意志と意欲に基いて、半ばは自給自足され、半ばは子どもなりに考慮の上で大人に向けられるものであって大人としてはただ単に与えることよりも、子どもの要求を子どもと協力して満足させる。という考え方をとって接するべきである。――そういう態度を以てこそ、子どもの夏の満足をもたらすことができる。としなければならぬと考える。

(なお細かな資料を通じてとりあげたい問題も多いが、時間(紙数)に余裕もないので以上止めた。新評論社刊「おもちゃ」にはやや詳しい資料と考察とを記している)

## 綜合遊具の製作とその利用についての一調査

千葉大学教育学部付属幼稚園

宮内孝  
富田陽子

# 一、綜合遊具作製の意圖

## 二、考案作製に當つての留意點

(紙面の關係で省略。全国幼稚園施設協議會編『幼稚園施設研究』第四号参照。)

## 三、初期作製とその利用についての調査

A、初期作製の概要。昨年春の初期作製では、園庭のかえでの木を中核にやぐらを組み、これに階段・複式滑り台・登り棒・低鉄棒併用肋木・ベンチを取付けた。これは全体計画のおよそ1/3程度である。(設計図略)完成したものを作り上げなかつたのは経費の不足と、子どもが実際に使用する状態をみて再考する余地を残すためである。色彩は、かえでの木の紅葉を考えて青の濃淡二色のペンキで塗装した。

## B、調査

### イ、目的

第一回調査(1)今後はどのように作りあげたらよいか。(2)じゆうぶんに活用して遊ぶようになるためにはどのような指導を必要とするか。をきる手がかりとして、入園後間もない子どもと一年間幼稚園生活の経験をもつた子どもとはそれぞれどう遊ぶかを調査した。

第二回調査(1)第一回と同一目的で、一学期間の指導後それがどう変わったかを調査した。

ロ、調査対象 千葉大学教育学部付属幼稚園全園児(二年保育年少児、同年長児、一年保育児)

ハ、調査期日 第一回調査(昭和三十年四月十三日、二十二日。第二回調査(同年十一月十六日、二十四日。)

ニ、調査種目 (1)戸外固定遊具の興味調査。綜合遊具利用状況調査。

## ホ、調査方法

(1)戸外固定遊具の興味調査(各組別、調査時間十五分。(2)綜合遊具利用状況調査(各組別、男女別、調査時間十五分。両調査とも、各遊具別に調査者を配置し、それぞれの遊具についてきた子ども、いった子どもの札番号を時間を追って記録する。(詳細は略)

## ヘ、調査結果と解釈

(1)戸外固定遊具の興味調査 (a)全般的にみて年度始めの第一回調査に比べて二学期の第二回調査では遊具の使用範囲が非常に拡がり、それぞれの利用度もたかまつた。このためか、年度用初には興味の圧倒的に集中した綜合遊具はやや利用度が低くなつたが、全般的にはやはり上位をしめている。(b)全体を通して動く遊具の利用度が高く、ブランコは二学期における女児の利用度の最高を示し、協力的に遊ぶ遊動木の使用は二学期になって男児の著しい向上を示している。(以上第一・二表略)

(2)綜合遊具利用状況調査 (a)利用遊具数は、年度当初に比べて二学期には全体的に増加し、特に年令の多い一年保育・二年保育児の増加が著しい。また、一年間の幼稚園生活の経験をもつた二年保育年長児は、二回の調査を通して最も多種類利用している。(以上第三・四表略)(b)各取付遊具別では年度当初二学期ともに複式滑り台の利用度が最も高い。やや技術を要する低鉄棒併用肋木は年度当初には各組男女とも最も利用度が少かつたが、二学期には利用度が増し、特に全然利用していなかつた女児も利用するようになってい(以上第五・六表)

## 四、その後の付設と利用についての調査

A、付設の概要 昨年度の調査の結果を手がかりとし、幼稚園における幼児の遊びのあり方を考へて今年度春には残りの3/4を付設

## 第五表 総合遊具利用状況調査

(その一) 各取付遊具の利用状況

(昭和30年4月調査)

		二年保育年少組			一年保育組			二年保育年長組			全 級		
		男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均
階 段	人数	23.4	1.6	12.5	2.5	3.8	3.2	0.4	2.1	1.3	8.8	2.5	5.7
	時間	3'20"	1'10"	2'15"	2'45"	1'21"	2'03"	1' 0"	1'16"	1'08"	2'21"	1'15"	1'48"
複式滑り台	人数	30.1	47.4	38.8	48.4	59.6	54.0	19.6	39.0	29.3	32.7	48.7	40.7
	時間	5'41"	8'12"	6'56"	7'04"	10'07"	8'35"	4' 0"	6'25"	5'12"	5'35"	8'14"	6'54"
登り棒	人数	2.6	5.7	4.2	5.5	0.5	3.0	6.0	8.2	7.1	4.7	4.8	4.8
	時間	41"	1'58"	1'19"	1'20"	40"	1' 0"	1'19"	1'35"	1'27"	1'06"	1'24"	1'15"
低鉄棒併用木	人数	1.5	0	0.8	0.4	0	0.2	1.1	0	0.6	1.0	0	0.5
	時間	5' 0"	0	2'30"	30"	0	15"	37"	0	18"	2'02"	0	1'01"
台の上	人数	10.0	20.8	15.4	12.7	9.4	11.1	19.0	16.4	17.7	13.9	15.5	14.7
	時間	1'22"	3'18"	2'20"	6'06"	2'25"	2'15"	3'30"	3'30"	3'30"	2'19"	3'04"	2'41"
樹 木	人数	11.9	3.6	7.8	5.5	3.3	4.4	12.0	8.9	10.5	8.9	5.3	7.6
	時間	8' 0"	5'30"	6'45"	8' 0"	4'20"	6'10"	6'55"	5' 0"	5'75"	7'38"	4'56"	6'17"
台の下	人数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	時間	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
傍 観	人数	0.4	5.8	3.1	0	5.7	2.9	0.4	0.7	0.6	0.3	4.1	2.2
	時間	1' 0"	45"	52"	0	30"	15"	50"	30"	40"	36"	35"	36"
その他の遊	人数	20.1	15.1	17.4	25.0	17.7	21.2	41.5	24.7	32.9	28.8	19.1	23.8
	時間	6'46"	4'48"	6'06"	4'17"	5' 0"	4'38"	8'37"	4'54"	6'45"	6'33"	4'54"	5'43"

(註) 表中の人数とは1分間の平均使用人数、時間とは遊びの1人平均継続時間の略。

なお、平均使用人数の数字は百分率を示す。(以下同調査の統計表について同様)

## 第六表 総合遊具利用状況調査

(その二) 各取付遊具の利用状況

(昭和30年11月調査)

		二年保育年少組			一年保育組			二年保育年長組			全 級		
		男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均
階 段	人数	5.7	7.8	6.8	0.9	9.5	5.2	6.0	12.8	9.4	4.2	11.0	7.1
	時間	44"	1'03"	53"	1'17"	55"	1'06"	42"	1'22"	1'02"	54"	1'06"	1' 0"
複式滑り台	人数	23.8	24.3	24.1	21.1	14.0	17.6	16.7	17.9	17.3	20.5	18.7	19.6
	時間	3'23"	3'15"	3'19"	2'26"	1'38"	2'02"	2'33"	2'01"	2'17"	2'47"	2'18"	2'32"
登り棒	人数	2.0	0.7	1.4	4.4	3.6	4.0	4.3	2.8	3.6	3.6	2.4	3.0
	時間	2'50"	20"	1'35"	1'28"	50"	1'09"	1'18"	51"	1'04"	1'52"	40"	1'16"
低鉄棒併用木	人数	1.2	0.7	1.0	4.4	3.2	3.8	4.3	1.7	3.0	3.3	1.9	2.6
	時間	2'50"	30"	1'40"	1'04"	43"	53"	58"	35"	46"	1'37"	36"	1'06"
台の上	人数	15.6	14.2	14.9	12.6	9.5	11.1	19.4	22.9	21.2	15.9	15.5	15.7
	時間	2'17"	2'13"	2'15"	2'14"	1'21"	1'47"	2'23"	2'46"	2'34"	2'18"	2'06"	2'12"
樹 木	人数	0.8	0	0.4	3.1	5.0	4.1	11.4	20.7	16.1	5.1	8.6	6.9
	時間	3' 0"	0	1'30"	3'30"	7'03"	5'16"	6'26"	7'07"	6'46"	4'18"	4'43"	4'30"
台の下	人数	0.4	5.0	2.7	2.7	0	1.4	1.3	3.4	2.4	1.5	3.8	2.2
	時間	50"	1' 0"	55"	1'03"	0	31"	44"	1'16"	1' 0"	1'01"	45"	53"
傍 観	人数	0.4	0	0.2	0	0.5	0.3	0	0	0	0.1	0.2	0.2
	時間	1' 0"	0	30"	0	1' 0"	30"	0	0	0	20"	20"	20"
その他の遊	人数	50.1	47.3	48.7	50.8	54.7	52.8	36.6	17.8	27.2	45.8	39.9	42.7
	時間	8'47"	9'02"	8'54"	8'23"	9'31"	9'75"	7'57"	4'44"	6'20"	8'22"	7'45"	8'03"

して完成した。まず、他の遊具への誘導をはかりいっそう多角的、継続的に遊べるようにやぐらから南へ長い渡廊下を出して、その先に階段、中広滑り台を取付け、さらに東側には雲梯を渡してジャングル・ジム（従来のもを利用）に結びつけ、いっそう大規模なものにした。また、動く遊具がなかったのも、その後、今春新設した波動廻転塔を複式滑り台とジャングル・ジム取付け滑り台の延長交点に設けて、全体を「ロの字型」の循環構成にした。（本年度の調査ではまた、綜合遊具の中に含まれていない）第一図はその完成図の一部である。色彩は緑の季節の効果をねらって、オレンヂの濃淡二色を加えた。

#### B、調査

イ、目的 調査結果に現われた遊びをもととして、これを教育的にどのように発展させ、目的を達成したらよいかを知る手がかりとして、本年度入園して間もない子どもと昨年度一年間幼稚園で生活し、綜合遊具の遊びを経験した子どもとは完成した綜合遊具でそれぞれどのように遊ぶかについて調査した。（調査形式は昨年度に準じた）。

ロ、調査結果と解釈

(1) 戸外固定遊具の興味調査 (a) 全体的に動く遊具の利用度が高いのは昨年度同様で、女兒はブランコ、男児は新設の波動廻転塔（前にも述べたようにその後綜合遊具に含めた）（表略）が最優位で、綜合遊具は二位になっている。

(2) 綜合遊具利用状況調査 (a) 昨年度に比べて取付遊具の増加にもなつて利用遊具数が全体的に非常に増加している。（表略）(b) 各取付遊具別にみると、利用度の非常に低いものは昨年度同様に登り棒と低鉄棒併用肋木である。また、年令の最も少い二年保育年少児

では中広滑り台が最も利用度が多く、一年保育や二年保育年長児では樹木の利用度が圧倒的に多い。（表略）

#### 五、今後の課題

本年度の調査は昨年同様の形式で行ったのであるが、この調査では綜合遊具の遊びのごく末端的な面だけしかすることはできない。また、この調査は未だほとんど指導をほどこさないときのものであるから、今後は綜合遊具のめざす集団的な遊びの構成、集団としての遊びの多角性・継続性・創造性・発展性等について子どもの実態をとらえながら、具体的な指導目標をたてて系統的・発展的に指導していかなければならない。そして、指導要項及其の結果を累加記録し、今後一年間あるいは二年間の指導記録と資料として綜合遊具遊びのよりよい指導へと研究を進めていきたいと考える。

### 三歳児保育の効果について

お茶の水女子大学

津 守 眞

堀 合 文 子

我々は昨年一年間、三才児の組の子ども十五名について、いろいろの方面より記録をとってきたが、本年四月に新たに四才児が加わったので、三才のときに保育をうけた子どもと、三才のときは家庭のみで過した四才の子どもとを比較することを試みた。三才児の保育は、四才五才の場合とはよほど違って、まとまった仕事を中心と